

古本説話集における希望表現について

柴田 昭二
連 仲友

目次

- 一、はじめに
- 二、希望表現の構成形式
- 三、各形式の用法
- 四、おわりに

一、はじめに

本稿は、別稿^①を受け、古本説話集を研究資料として、それにおける希望表現^②の実態を説明しようとするものである。

古本説話集は、『日本古典文学大事典』^③などによると、唯一の写本である梅沢記念館蔵鎌倉中期写本には書名が記されていないが、昭和一八年（一九四三）に重要美術品に認定された際に仮題として付された「古本説話集」を通称として用いることが多い。原書名未詳、編者未詳の説話集であり、その成立については諸説があるが、大治年間（一一二六～一一三二）成立が有力である。前半は世俗説話四六話、後半は仏教説話二四話、計七〇話を集録する。今昔物語集・宇治拾遺物語・世継物語と共通する説話を多く含む。本文は平仮名で表記され、僅かに漢字表記の

語を見る程度である。

テキストには、岩波書店刊新日本古典文学大系『古本説話集』^④を用いる。その底本は文化庁蔵本（梅沢記念館旧蔵）である。複製本^⑤により表記を確認した。なお、傍線部は原文の表記にもどした。

二、希望表現の構成形式

古本説話集における希望表現と認められる構成形式及びそれぞれのおよその用例数は以下の通りである。

「ムト思フ」	(一六例)
「〜給へ」	(六例)
「ホシ」	(二三例)
「願 ネガフ」	(四例)
「望 ノゾム」	(一例)
「祈 イノル」	(一四例)
「乞・請 コフ」	(六例)
「求 モトム」	(五例)

「バヤ」	(九例)
「ガナ」	(二例)
「テシガナ」	(二例)
「ナム」	(二例)
「マホシ」	(二例)
「マシ」	(二例)

古本説話集における希望表現の構成はこれまで考察してきた宇治拾遺物語などと同じく、慣用形式、名詞・形容詞・動詞形式、終助詞・助動詞形式に広く分布している。慣用形式は「〜ムト思フ」「〜給へ」、名詞形式は「願」、形容詞形式は「ホシ」、動詞形式は「願フ」「望ム」「祈ル」「乞フ」「請フ」「求ム」、終助詞形式は「バヤ」「ガナ」「テシガナ」「ナム」、助動詞形式は「マホシ」「マシ」が見られる。しかし、希望表現の重要な構成形式である「〜ムトス」および音読形式の名詞「欲」、助動詞形式の「願ハクハ」は見られない。なお「〜ムトス」「〜ムズ」はすべて将然の意で用いられる。

三、各形式の用法

(一) 慣用形式の用法

1、「〜ムト思フ」

希望表現と認められる「〜ムト思フ」は一六例見られ、主に和歌と会話文に用いられている。

(1) 代はらむとおもふ命は惜しからでさても別れむほどぞ悲しき

(上五 四二一頁)

例(1)は和歌における用例である。「わが子に代りたいと思う私の命は」の意と解され、希望表現の下位分類の「願望⁶⁾を「説明」⁷⁾する用法である。

(2) 国へ下り着きて、いつしかと文上げむと思ふに、たしかなる便りもなし。(上二八 四三六頁)

(3) 「我行ひしことは、一切衆生の苦を抜かんと思ひてこそ、芥子ばかり身を捨てぬ所なくは行ひしか。」(下五五 四七〇頁)

(4) 「この辺にすまむと思ひて来たるに、家もなし。便りもなければ、いかゞせまし」と言へば、(下六二 四九〇頁)

例(2)は「早く京へ手紙を出したいと思うが、」の意、例(3)は「衆生の苦を抜きたいと思つて、」の意、例(4)は「この辺に住みたいと思つて来たが、」の意と解され、いずれも従属節に用いられて、「願望」を「説明」する用法である。

2、「〜給へ」の用法

「〜給へ」は六例見られ、いずれも会話文か心話文における用例である。

(5) 「わが頼み奉りたる観音、助け給へ」と思ふほどに、

(下四八 四五六頁)

(6) 仏の御前に向きて、「観音、助け給へ」と手をすりて惑ふに、

(下四九 四五七頁)

(7) 「大悲観音、助け給へ」と言ふよりほかにまた申こともなかりければ、(下六七 五〇六頁)

(上一六 四二二頁)

例(5) (6) は心話文、例(7) は会話文における用例で、いずれも命令形を取りながら神仏に対して「助けてほしい」という祈りの心情を表し、「希求」⁽⁸⁾を「表出」⁽⁹⁾する用法である。

(8) 「疾く法師になさせ給へ」と、涙にむせかへりて、泣くく言ひければ、(上四〇 四四六頁)

例(8) は会話文における用例で、「早く法師にならせてほしい」の意と解され、向かう対象は神仏ではなく、貴い聖人に向かい依頼・懇願する命令形を取りながら人に対する「希求」を「表出」する用法である。

ここで指摘されるのは、古本説話集における「く給へ」の用例は「願クハ」と呼応して用いられていないことである。即ち、「願クハく給へ」の形ではなく、単独の「く給へ」の形で用いられている。考えるに、「願クハ」は元々漢文訓読語で、漢文訓読調の文献に多用されるが、古本説話集は和文脈の文章であり、漢文訓読体の表現「願クハく命令形」に対応する希望表現と考えたい。

(二) 形容詞、名詞、動詞形式の用法

1、「ホシ」の用法

形容詞「ホシ」の用例は二三例見られ、その内「ホシサ」は一例、「ホシガル」が一例含まれる。

(9) 鶯よなどは鳴くぞ乳やほしき小鍋やほしき母や恋しき

例(9) は和歌における用例で、「乳がほしいのか。小鍋がほしいのか。」の意と解され、「願望」を「説明」する用法である。

(10) 物のみほしくて、経も読まれず、念仏だにせられず。

(下五三 四六四頁)

例(10) は地の文における用例で、「物を欲がるばかりで、」の意と解され、これも「願望」を「説明」する用法である。

(11) 「今二三日の程、馬の草の少しほしき。くれてんや」と言へば、

(下五四 四六八頁)

例(11) は会話文における用例で、「馬の草が少し欲しい。」の意と解され、これは「願望」を「表出」する用法である。

(12) さて、物のほしさも失せぬ。(下五三 四六五頁)

(13) 「陸奥国より、この馬をたゞ据えて上らせ給つる馬を、よろづの人のほしがりて、」(下五八 四八〇頁)

例(12) は「物を欲することもなくなつた。」の意と解され、「ホシ」と接尾語「サ」と複合した名詞用法である。一方の例(13) は、「多くの人がこの馬を欲しがって、」の意と解され、「ホシ」と接尾語「ガル」と複合した他人の希望を表現する動詞用法である。

また、「ホシ」の対象物は、例(11)における「乳」「小鍋」、例(13)における「馬の草」、例(15)における「馬」を除けば、他はすべて「物ほし」

の慣用的な用例である。

2、「願」の用法

「願」は四例見られ、その内漢字で表記された音読形式の名詞「願」は二例、訓読形式の動詞「願フ」は二例見られる。

(14) いま一人は、后の御裳の裾をひき被きて伏し給て、多くの願を立て給ふ。(下六三 四九三頁)

例(14)は「多くの願をお立てになった」の意と解される。この「願」は仏教的な内容で名詞用法である。

(15) もろくのねかひみな満ちぬることなり。(下五三 四六四頁)

(16) 「馬をがな」とねかひ惑ひける程に、この馬を見て、「いかにせん」と騒ぎて、(下五八 四八二頁)

例(15)における「ねがひ」は動詞連用形の名詞法であり、仏教的な「願」より広い「事物を願うこと」を表すものである。例(16)における「ねがひ」は複合動詞の一部で、実動詞用法である。

3、「望」の用法

「望」は一例見られる。

(17) 挙周、のそむ事有けるに、申文の奥に書いて、(上五 四一一頁)

例(17)における「のぞむ」は動詞連体形で、実動詞用法である。

4、「祈」の用法

「祈」は一四例見られ、希望表現の構成形式において多い存在である。

(18) 人のいのりは、貴きもきたなきも、たゞよく心に入りたるが験あるなり。(下五一 四六三頁)

(19) 「母の尼していのりはすべし」と、(下五二 四六三頁)

例(18) (19)における「いのり」は「祈ること」の意で、動詞連用形の名詞用法である。

(20) 「御いのりせよ」といふ仰もなかりければ、御しんにも召さず。(下五二 四六一頁)

(21) 「それを召していのらせさせ給はば、怠らせ給なむかし」と申せば、(下六五 五〇〇頁)

例(20) (21)は「祈る」の意であり、実動詞用法である。

(22) 「それは、たゞ今参らずとも、こゝながらいのり参らせ候はん」と言へば、(下六五 五〇一頁)

(23) 「さらば、いのり参らせん。」(下六五 五〇一頁)

例(22) (23)における「祈り参る」は複合動詞形式であり、実動詞用法

である。

5、「乞」の用法

「乞」は五例見られる。

- (24) 雪消えたらばこそ出でてこしきをもせめ、人を知りたらばこそ「訪へ」と言はめ、(下五三 四六三頁)

例(24)における「乞食」は出家者が仏の教えに従って門立ちをして食を求める、即ち托鉢のことである。

- (25) 今は昔、逢坂の関に、行き来の人に物をこひて、世を過ぐす物ありけり。(上二四 四二八頁)

- (26) 「あの男の持ちたる物は何ぞ。かれこひて、我に得させよ」と、(下五八 四七六頁)

- (27) 隣の郡の人も、聞きつ、物こふに従ひつ取らず。(下六一 四九一頁)

- (28) 大きな校倉のあるを開けて、物取り出でさする程に、この鉢飛びて、例の物こひに來たりけるを、(下六五 四九八頁)

例(25) (26) (27) (28)における「こふ」はいずれも実動詞用法である。

6、「請」の用法

「請」は一例見られる。

- (29) 五六日こひ念ずれば、十日ばかりになりなければ、力もなく、起き上がるべき心地もせず。(下五三 四六三頁)

例(29)における「こひ念ずれば」は「仏に祈念する」の意であり、複合動詞形式の実動詞用法である。

7、「求」の用法

「求」の用例は五例見られる。

- (30) 「高き位をもとめ、重き宝をもとめばこそあらめ、たゞ今日食べて、命生くばかりの物をもとへて賜べ」と申程に、(下五三 四六四頁)

- (31) 「近く水やある」と走り騒ぎ、もとむれども、水もなし。(下五八 四七七頁)

- (32) 御殿籠り入らせ給つれば、水もとめ候ひつれども、(下五八 四七八頁)

例(30) (31) (32)は「高い地位を求め」、「貴重な宝を求め」、「物を求め」、「水を求め」の意であり、いずれも実動詞用法である。なお、例(30)における「求めて」は原文「へ」とあり、音韻変化によるものと解釈する。

(三) 終助詞・助動詞の用法

1、「バヤ」の用法

古本説話集に「バヤ」は九例見られ、その内和歌に一例、会話文に二例、心話文に六例見られる。

(33) めぐりくる春くごとに桜花いくたび散りき人に問は、や

(上三八 四四四頁)

例(33)は和歌における用例で、「人に聞いてみたいものだ。」の意と解され、「願望」を「表出」する用法である。

(34) 「かくおかしく、めでたき御有様を「人聞きけり」と思し召されん料に、知られはや」など言えば、(上一 四〇四頁)

(35) 俊賢の宰相、「内侍になさはや」とのたまひけるとぞ。

(上一二 四一九頁)

例(34) (35)は会話文における用例で、「御所の方に知られたい」「内侍にしてほしい」の意と解され、「願望」を「表出」する用法である。

(36) 「たゞすすろにをのづから物を食は、や」と思へば、めでなくし据ゑて、きとは得ぬ。

(下六八 五一〇頁)

(37) 「手もあらはや」と思へば、すすろに出で来。(下六八 五一〇頁)

例(36) (37)は心話文における用例で、「物を食べたい」「人手が欲しい。」の意と解され、「願望」を「表出」する用法である。

2、「ガナ」の用法

「ガナ」は二例見られる。

(38) 身投ぐとも人に知られじ世の中に知られぬ山に見るよしも哉(上一七 四二二頁)

(39) 「馬をかな」と願ひ惑ひける程に、この馬を見て、「いかにせん」と騒ぎて、(下五八 四八二頁)

例(38)は和歌、(39)は心話文における用例で、「身を投げる術がほしい。」「馬がほしい。」の意と解され、「願望」を「表出」する用法である。

3、「テシガナ」の用法

「テシカナ」は一例見られる。

(40) 十日の国にいたりてしかな(上五 四一〇頁)

例(40)は和歌における用例で、「十日にはあの国に到着したい」の意と解され、「願望」を「表出」する用法である。

4、「ナム」の用法

「ナム」は和歌に二例見られる。

(41) 頼みては久しく成ぬ住吉のまつこのたびのしるし見せなむ(上五 四二二頁)

(42) 心みに雨も降らなん宿過ぎて空行く月の影やとまると

例(41) (42)は和歌における用例で、「靈験をしめしてほしい。」「雨でも降ってほしい。」の意と解され、他者に対する「希求」を「表出」する用法である。

5、「マホシ」の用法

「マホシ」は二例見られる。

(43) 古めかしうおほしつ、みておはするに、気高き交らひもせさせまほしうおほせど、かくうち合はぬ身の有様なれば、思ひもかけず。

(上二八 四三四頁)

(44) 会はぬまでも、見に行かまほしけれど、(下六四 四九五頁)

例(43) (44)は「気高い交じらいをしたいと思うが」、「見に行きたいけれど」の意と解され、「願望」を「説明」する用法である。

6、「マシ」の用法

「マシ」は一例見られる。

(45) 世中にあらましかばと思ふ人なきは多くもなりにけるかな

(上三六 四四三頁)

例(45)は和歌における用例で、「世の中にもっといいほしいと思う人」の意と解され、「希求」を「説明」する用法である。

古本説話集における希望表現の構成形式は多様にわたる。しかし、音読形式の名詞「欲」、助動詞用法の「願ハクハク給へ」は見られない。これは古本説話集の文体に原因があると考えられる。

各形式の用法について見ると、「ムト思フ」はすべて従属節に用いられ、希望表現の下位分類の「願望」を「説明」する用法である。「給へ」は「願クハク給へ」の形式ではなく、単なる「給へ」の形式で「希求」を「表出」する用法である。「ホシ」は主に「物欲し」の形で「願望」を表し、それに接尾語と複合した「ホシサ」「ホシガル」で名詞用法、動詞用法が見られる。「願」は仏教用語としての音読形式の名詞用法と広く「願うこと」を表す「願ひ」及び実動詞用法が見られる。「祈」は名詞用法と実動詞用法が見られるが、「望」「乞」「請」「求」は実動詞用法のみ見られる。終助詞「バヤ」「ガナ」「テシガナ」は「願望」を「表出」するが、「ナム」は「希求」を「表出」する。終助詞「マホシ」「マシ」は「願望」を「説明」する。総じて言えば、古本説話集における希望表現はこれまで考察してきた説話文学資料の希望表現と小異を有するが、基本的には同じ傾向のものである。

【参考文献】

川口久雄解題『重要文化財 梅沢本 古本説話集』勉誠社 古典資料類従6 昭和五二年四月発行

【注】

(1) 柴田昭二、連仲友「希望表現の通史的研究序説」『香川大学教育学部研究報告 第一部第109号』平成12年3月

(2) ここでいう希望表現とは、人の願い望みに関する、一種の心情的表現形式である。また、その下位分類として、話者自身の動作・状態に対して向けられ

るものを「願望表現」、他者の動作・状態に対して向けられるものを「希求表現」と称する。さらに、希望を直接発する場合を希望の「表出」、それ以外の問い質しや過去などの場合を希望の「説明」と称する。現代日本語においては、「願望」は「〜たい」の形で、「希求」は「〜てほしい」の形で表現するのが最も一般的である。したがって、一人称現在形形式「一人称〜たい」「一人称〜てほしい」はそれぞれ「願望」、「希求」の「表出」であり、一人称の過去形「一人称〜たかった」「一人称〜てほしかった」、二人称形式「二人称〜たいか」「二人称〜てほしいか」、三人称の「三人称〜たがる」「三人称〜てほしがる」などの形式は、「説明」にあたる。

(3) 『日本古典文学大事典』第二卷 岩波書店 一九八四年二月二〇日第一刷発行

(4) 『古本説話集』中村義雄、小内一明校注 岩波書店 新編日本古典文学全集42
一九九〇年一月二〇日第一刷発行

(5) 『重要文化財 梅沢本 古本説話集』勉誠社 古典資料類従 6 昭和五二年四月
発行

(6) 注(2)参照。

(7) 注(2)参照。

(8) 注(2)参照。

(9) 注(2)参照。

(しばたししょうじ 香川大学教育学部教授)

(れんちゅうゆう 広島市立大学客員研究員)

(二〇一五年五月二九日受理)